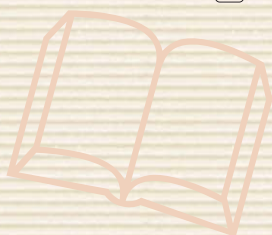


探検！言葉の森 ④

京都教育大学教授

もりやま
森山 卓郎 たくろう

ケーワイ
KY



「KY」という言葉が流行っている。言うまでもなく、「空気読めない」のローマ字省略語。KとYだから「空気読んでる」でもいいようなものだが、否定のついた意味になっているところがミソだ。

息子の中学では「SKY」というのもあるという。「スーパー空気読めない」で「スカイ」と発音するらしい。このほか、「KO」（空気重い）、「BY」（ばかやろう）、「PK」（パンツ食い込んでる）、「EE」（要らんこと言い）、「EC」（要らんことしいう）というものもあるそうだ。最後の二つは、実はローマ字なら「ー」「ーS」ではないかと思うのだが、そんなことはどうでもよくて、

いちいちこだわったりすると、それこそ「KY」なのだそうです。はい。

このような言葉は前からあった。『日本俗語大辞典』（米川明彦 編／東京堂出版）によれば、「MMK」（もててもてて困っちゃう）というのがある。昭和三〇年に用例がある。「MM」（マジむかつく）とか「MK5」（マジ切れる五秒前）とかも、もう十年ほど前に『現代用語の基礎知識』に登録されている。ただし、今これらの言葉はあまり聞かないようだから、一時的な言葉遊びのようなものなのかもしれない。

もっとも寿命の長いものもある。今、普通に使う「エッチ」は、同辞典によれば、「変態」のローマ字書きから来た言葉だが、昭和二十七年の雑誌に用例があり、戦後広まって、一貫して使われている。ちなみに、戦前には「husband」から来た「H」というのがあって、夫のことをいう女学生言葉だったという。誤って使うと「TK」（とんだ勘違い）である。

品詞という観点で見れば、当初の「エッチ」はいわば「痴漢」に相当するような「変態の人」を表す名詞だったようである。今もその用法はあるが、その後、「エッチだ」「エッチな」という形容動詞としての使い

方ができ、さらに、一九八〇年代には「エッチする」といううちよつと別の意味の動詞用法も広がった。「H」は日本語の世界で意気盛んに発展（？）している。

「KY」はと言えば、「KYだ」「KYの」と言える点で名詞ということになるが、「KYが」みたいな主語の表現はあまり聞かないような気もする。意味も「空気読めない」という表現のまとまりだ。「MD」（名詞としてどうかと思う）というところか。先日、卒論発表の後の予餞会の余興で、学生たちがこんなローマ字言葉のコンクールをやっていた。「SSK」（すみません卒業させてください）なんてのもあったが、なんと優勝作は「MN」。「森山先生寝てる」だという。ぼくは酔うとすぐ寝てしまうことが多いのです。でも、本当は「NM」（寝ているように見えるだけ）。

